

多言語国家フランスーフランスの少数話者言語

原野 昇

1 フランス語の起こり

現在のフランスよりも少し広い地域はその昔ガリア (フランス語ではゴール) と呼ばれていた。ガリアとは「ガリー (ゴール)人の住んでいる地域」という意味である。ガリー (ゴール)人というのはケルト族の一種族で、彼らの話すガリア語はケルト語の一種である。

そこに紀元前1世紀頃、南からラテン語を話すローマ人がやって来て、ガリアを征服し、ローマ帝国の領土にした。(カエサル (シーザー) による『ガリア戦記』参照) 紀元後2~3世紀頃には、ガリアの人々の言語はラテン語のくずれたローマ風の言葉、ロマン語となった。



TSS 文化大学で講演する著者

476年に古代ローマ帝国が滅亡する頃、ガリアは東から来たゲルマン人に征服され、フランク王国の領土となった。しかし、征服者のゲルマン人たちもガリアで話されていたロマン語を話すようになった。

このロマン語はラテン語が変化したものであるが、古典期の文語ラテン語との隔たりがだんだんと大きくなり、7~8世紀頃には、ラテン語とは別の言語、フランス語と呼ばれるようになった。フランス語は、ラテン語がケルト語やゲルマン語との接触によって変化した言語と言える。

イタリア語、スペイン語、ポルトガル語、ルーマニア語も、それぞれの地域でラテン語がくずれたロマン語が、それぞれの地域の言語との接触により差が生じて別の言語になったものである。ラテン語から派生したこれらの言語はロマン諸語と呼ばれる兄弟言語である。

2 フランスの少数話者言語

フランス国民の全員がフランス語を母語としているかと言えば、そうではない。フランス語以外の言語を母語とする人々もいる。フランス南部で話されているオック語 (オクシタン語)、東部アルザス地方のアルザス語、ブルターニュ半島のブルトン語、南部のスペイン国境近くの地中海沿岸沿いのカタルーニャ語、コルシカ島のコルシカ語、北東部、ベルギー国境近くのフラマン語、フランス南西部大西洋岸沿いのバスク語の7言語がその主なものであり、地域語とも呼ばれる。

オック語は、フランス語と同様にガリアで話されていたロマン語 (ラテン語のくずれた言語) に由来するもので、フランス語 (北部ガリアのロマン語に由来) と近い関係にある。コルシカ語はイタリア語のコルシカ方言のことである。イタリア語はアルプス南部のイタリア国境近くでも話されている。カタルーニャ語は、スペイン語に近く、同じくラテン語由来の言語である。一方、アルザス語はドイツ語のアルザス方言と呼ぶこともできるし、フラマン語はオランダ語に近く、アルザス語と同様ゲルマン語の一つである。ブルトン語はケルト語の一つであり、スコットランド語、アイルランド語、ウェールズ語などと兄弟の言語である。バスク語は、ラテン語、ケルト語、ゲルマン語など近隣のどの言語とも系統関係のない孤立した言語である。

7つの少数話者言語の話者数をあげておく。(注 1)

	1985 年	2004 年	2011 年
・オック語(オクシタン語)	1,100 万	78.6 万	100 万単位
・アルザス語(ドイツ語)	130 万	54.5 万	100 万以上
・ブルトン語	68.5 万	29.5 万	70 万
・カタルーニャ語	20 万	xxx	20 万
・イタリア語(コルシカ, アルプス) コルシカ語	19 万	13.3 万	27.5 万以下
・フラマン語	9万	xxx	xxx
・バスク語	8.5万	8万	6万弱

どのような基準で「ある言語の話者」と判定するかによって、話者数に大きな差が生じる。特にオック語話者数については、統計によって差が非常に大きい。反対に、バスク語話者数はどの統計でも大きな差がない。

3 母語と母国語

フランスの少数話者言語とはどのようなことを意味するのだろうか。それは彼らの言語は母語ではあるが母国語ではない、ということである。母語というのは、人間が幼少期から自然に習得した言語で、第一言語と呼ばれることもある。たとえば、アルザス地域のアルザス語話者にとって、

アルザス語は彼らの母語ではあるが母国語ではない。彼らはフランス国民なので、彼らの母国語はフランス語である。すなわち彼らのほとんどは二言語併用者である。

母語と母国語が異なっているということは、我々日本人にとってはなかなか理解し難いが、仮に日本の国語が英語と仮定してみるといいだろう。母語は日本語なので、家庭内はもちろん友達と遊ぶときも日本語である。ところが、小学校で習う国語の時間は英語の時間であり、その他の授業も先生はすべて英語で喋っている。新聞も英字新聞、ラジオ、テレビで聞こえてくることばも英語ばかり。国会論戦も市役所に提出する書類も英語である。英語ができなくては生活できない。やむをえず英語も習得して喋れるようになり、日本語と英語の二言語併用者となる。

・言語と国家

このように、母語と母国語との違いは「国」という語にある。「国境」はある「国」の領土と別のある「国」の領土とを画する境であり、それは歴史的なさまざまな経緯から両国の合意に基づいて(とばかりは言えないが)決定された人為的な境界線である。ところが、ある言語を母語とする言語集団の住んでいる地域と、別のある言語を母語とする言語集団が住んでいる地域との境界は、そのような人為的な国境線と一致しない場合も多い。たとえば、バスク語を話す人々はフランス南西部からスペイン北部の大西洋岸に広がっているが、スペインとフランスの国境線は、この地域を分断する形で引かれている。

・憲法と言語

アルザス語を母語とするフランス人もバスク語を母語とするフランス人もフランス語を喋らなければならないのはなぜか。それは憲法に「共和国の言語はフランス語である」と定められているからである。(注 2) このように、憲法でその国の国語や公用語が定められている国は多い。特にいわゆる多言語国家では、言語問題が深刻な問題だけに、憲法に明記してある場合が多い。たとえばスイスでは憲法で、ドイツ語、フランス語、イタリア語、ロマンシュ語の4言語がスイスの国語(国民語)であると定められているが、すぐ後で、そのうちのドイツ語、フランス語、イタリア語の3言語がスイスの公用語とされている。すなわち、話者数が国民の約0.5%のロマンシュ語は、連邦の公用語とは認められていないが、スイスの国語(国民語)の一つであることが憲法で保証されているということである。(注 3)

その国の言語(公用語)が何語であるかは国家存立の重要な要素であるので、憲法に定められている国が多い一方で、定めがない国も多い。たとえば日本国憲法にも言語に関する条文はない。日本における言語状況が、わざわざ日本語が日本の公用語であることを憲法に定める必要もないくらいに明白であるからである。(注 4)

4 アルザス語

・『最後の授業』

フランスの作家アルフォンス・ドーデ(1840-1897)の短編に『最後の授業』というのがある。普仏戦争でフランスが敗れた1871年のアルザス地方の田舎の小学校が舞台である。フランツ君は勉強が嫌いで、その日も学校へ行く途中、道草をくって遅刻した。教室に着いてみると、教室の雰囲気がいつもと違ってみんなシーンとしている。アメル先生もいつもと違い、終了式などの時にしか着ないフロックコート姿である。教室の後ろには、村の駐在さんや郵便配達屋さんたちが

膝に古い教科書を乗せて座っている。遅刻した生徒には定規を手に厳しく叱るはずのアメル先生が、今日は「フランツ君、早く席に着きなさい」とやさしく促す。アメル先生は「今日はフランス語の最後の授業だからしっかり頭に入れなさい。明日からはドイツ人が来てドイツ語の授業となる。その時、お前たちフランス人のくせにフランス語が話すことも書くこともできないじゃないか、と言われたらどうするのか。たとえある民族が奴隷状態に陥っても、自分たちの言葉を失わない限り、牢獄の鍵を握っているようなものなのだから。」と言って授業を進める。やがて正午の鐘が鳴る。アメル先生は黒板一杯に大きな字で「フランス万歳 VIVE LA FRANCE!」と書き、生徒の方を向き、声を出すこともできず、手が出ていくようにと合図する。

この短編は美しい国語愛を謳った作品としてある時期日本の小学校の国語の教科書に採用され、日本中の子供たちが知っていた。ところが、この作品は小学生に理解してもらうには余りにも大きな問題が含まれているという指摘がなされ、教科書から消えた。どの点が難しいのであろうか。それはアメル先生の言った言葉「たとえある民族が奴隷状態に陥っても、自分たちの言葉を失わない限り、牢獄の鍵を握っているようなものなのだ」がその場に適したものではないからである。それを言うなら、フランツ君にとっての自分たちの言葉はアルザス語(ドイツ語)のはずである。アルザス地方の子供たちにフランスの「国語」を教える立場のアメル先生は、南フランスの地方語・オック語の擁護と顕揚のために活躍したフレデリック・ミストラル(1830-1914)の言った言葉を、いわば換骨奪胎してフランツ君たちに言っていることになる。(注5)

5 アルザス地方の歴史とEUの起こり

・アルザス地方の歴史

1681 ウェストファリア条約, Strasbourgフランスに併合(フランス領)

1789 フランス革命, フランスへの同化強化(ドイツ的伝統崩れる)

1870 - 1871 普仏戦争(フランス敗北)(ドイツに割譲)

フランスに激しい反ドイツ感情

1919 第一次世界大戦(ドイツ敗北)(フランス領)

1939 - 第二次世界大戦中(ドイツに併合)

1945 - 第二次世界大戦後(フランス領)

上記の年表はアルザス地方の住民にとってどのようなことを意味するのであろうか。それは、昨日までドイツ国民としてドイツの歴史、民族の誇りをもち、ドイツの憲法に従い選挙権を行使していた者が、一夜明けるとそれらすべてが否定され、フランス国民として、フランスの歴史、フランスの選挙権が強制されるということである。その際たるものが軍隊である。1939年にアルザス地方がドイツに併合された時、ドイツ軍に召集され編入されたアルザス人兵士は、昨日まで同胞であったフランス人に対し銃口を向け、敵国人として殺すように命じられたのである。

・EUの歴史

1950 シューマン・プラン

1957 ローマ条約(ドイツ, フランス, イタリア, ベルギー, オランダ, ルクセンブルグ)

ヨーロッパ石炭鉄鋼共同体(ECSC)

1972 EC欧州共同体(上記6か国にイギリス, アイルランド, デンマーク)

1992 EU欧州連合 (マーストリヒト条約)

ドイツとフランスは1世紀の間に3度も激しい戦火を交え、お互いに何百万という屍体の山を築いてきた。その狭間にあって非常に大きな犠牲を強いられてきたのがアルザス地方である。このような愚を繰り返してはならないという反省の上に立って生まれたのがヨーロッパ石炭鉄鋼共同体であり、今日の EU に発展したものである。その立役者の一人でフランスの外務大臣を務めたモーリス・シューマン (1911-1998) はアルザス出身である。

(注 1)

- ・ 1985 年の数字 : 田中克彦『現代ヨーロッパの言語』岩波新書, 1985 より。
- ・ 2004 年の数字 : 『朝日新聞』2008.12.26 より。仏国立統計経済研究所の 04年の資料などから作成。数字は話す人の数 (地域以外も含めた総数)。
- ・ 2011年の数字 : 田口 紀子 (京都大学文学研究科)
[『フランスの言語政策とCECR \(欧州言語共通参照枠\)』](#)、日本学術会議言語・文学分野参照基準検討分科会、2011年12月16日発表より。(2014.12.25 閲覧)
- ・ xxx 欄は、数字が記載されていない。

(注 2) フランス第五共和国憲法第2条。ただしフランスでも、フランス語が憲法に定められたのは 1992年のことである。

(注 3) ただし、グラウビュンデン州では法律上の公用語となっている。

(注 4) アメリカ合衆国の言語状況は日本よりもずっと複雑で、種々の言語話者がいるが、アメリカ合衆国憲法に英語が公用語であるという条項はない。

(注 5) 「フランス人のくせにフランス語が話すことも書くこともできないじゃないか」はその後の版では「フランス語が読むことも書くこともできないじゃないか」となっている。

(本稿は 2015 年 5 月 19 日に行われた TSS 文化大学における講演の概要です)